

# 農耕文化複合と弥生文化

Yayoi Culture as a Complex of Multiple Farming Cultures

設楽博己

SHITARA Hiromi

はじめに

- ① 弥生文化の描き方
- ② 東日本の弥生文化
- ③ 「農耕文化複合」としての弥生文化論

おわりに

## 〔論文要旨〕

弥生時代の定義に関しては、水田稲作など本格的な農耕のはじまった時代とする経済的側面を重視する立場と、イデオロギーの質的転換などの社会的側面を重視する立場がある。時代区分の指標は時代性を反映していると同時に単純でわかりやすいことが求められるから、弥生文化の指標として、水田稲作という同じ現象に「目的」や「目指すもの」の違いという思惟的な分野での価値判断を要求する後者の立場は、客観的でだれにでもわかる基準とはいえない。本稿は前者の立場に立ち、その場合に問題とされてきた「本格的な」という判断の基準を、縄文農耕との違いである「農耕文化複合」の形成に求める。これまでの東日本の弥生文化研究の歴史に、近年のレプリカ法による初期農耕の様態解明の研究成果を踏まえううえで、東日本の初期弥生文化を農耕文化複合ととらえ、関東地方の中期中葉以前あるいは東北地方北部などの農耕文化を弥生文化と認めない後者の立場との異同を論じる。弥生文化は、大陸で長い期間をかけて形成された多様な農耕の形態を受容して、土地条件などの自然環境や集団編成の違いに応じて地域ごとに多様に展開した農耕文化複合ととらえううえで、真の農耕社会や政治的社会的形成はその後半期に、限られた地域で進行したものとみなした。

【キーワード】 弥生時代、農耕文化複合、時代区分、弥生文化、レプリカ法

## はじめに

弥生文化は「日本で食糧生産が始まってから前方後円墳が出現するまでの時代の文化」とされる〔佐原・金関 1975: 23〕。経済史的な時代区分にもとづく佐原真と金関恕によるこの定義は、一般化している。ところが、近年この定義を排して、弥生文化の範囲をきわめて狭いものにしようとする意見がみられるようになった。それは、弥生文化を大陸系のイデオロギーにもとづく社会的・政治的統合が萌芽し、やがて達成される社会の文化であると規定するものである。

筆者は佐原・金関の定義にしたがう立場であったので、この新しい見解に対しては「縄文系弥生文化」という概念を用い、政治的支配体制を築くにいたった西日本の弥生文化を偏重した歴史観に対する批判的な認識〔春成 1999〕などを踏まえて弥生文化の多様性を主張した〔設楽 2000〕。この見解は東日本の初期弥生文化を弥生文化の範疇で理解するという学史を尊重した結果でもあったが、なぜ弥生文化に包摂するのかという説明をしないまま提示した面があった。

その後、縄文系弥生文化を再考するうえで重要な研究と調査がおこなわれるようになった。それはレプリカ法による土器の表面にみられる植物種実の圧痕の同定作業、および初期農耕集落の実態の解明が期待できる遺跡の発掘調査である。

本稿では東日本の初期弥生文化がどのように理解されてきたのかという点を、政治的な性格を弥生文化の基本原則として考える立場と照合したうえで、新たな研究の展開を踏まえて縄文系弥生文化を再考する。その結果、弥生文化は「農耕文化複合」の視点からとらえるのが適切だと判断した。この理解は弥生時代を経済史的、文化史的時代区分にもとづいて把握したものであるが、弥生文化を「農耕社会」の文化とする社会史的な学説についての論評もおこないたい。

## ①……………弥生文化の描き方

### (1) 二つの弥生文化観

#### 1 山内清男と森本六爾の弥生式文化観

蒔田鎗次郎によって弥生式土器が命名されたが、弥生式土器に焼け米と金属器が伴うことが明らかになるにつれて、縄文土器と弥生式土器は時代的に区別されるのではないかということも、漠然とではあるが意識にのぼるようになった。その差を時代差ととらえて、その違いの背景が農耕の有無であることを明示したのは、山内清男である。

山内は1932年の「日本遠古之文化」で次のように述べている。「日本内地に於ける住民の文化は大きく二つに区別し得るであろう。第一は大陸との交渉が著明でなく、農業の痕跡のない期間、第二は大陸との著明な交渉を持ち、農業の一般化した期間である。前者は縄紋土器の文化に相当し、後者の最初の段階が弥生式の文化である」として、特筆すべき事項に①大陸との交渉と②農業による新生活手段の二点をあげた〔山内 1932a: 85〕。

これとほぼ同時に森本六爾が弥生式文化について発表した。弥生式の文化は農業を伴うもので、

水稻を主とする農業は紀元前1・2世紀ころから紀元前後にかけて九州島に伝播したと論じたうちはまだ山内と同様に弥生式の農業の生産性も低く、狩猟採集をおこなっていたと考えていたが〔森本1938:4〕、その後弥生式時代は農業が支配的であると考えようになった。これに対して山内は、弥生式の農耕をHackbau＝耨耕民の農耕段階として、弥生式を農業社会ととらえて支配的な生産手段が農業であったという森本の考えを批判した〔山内1937:277〕。弥生式文化に対する先駆的な業績は山内にあり森本が典拠を示さず追従したのに対して、弥生式の農耕の程度の評価については森本が正鵠を射ていたという皮肉な結果であった。

## 2 弥生文化の社会的側面

山内が指摘した弥生文化を構成している3要素のうち、青銅器が象徴する大陸系の文化だけを強調し、漢代文化の伝播により成立した青銅器時代という文化の型の存在を主張する森本の理解〔森本1929:3〕に対して山内はこう述べている。「弥生式の時代を青銅器時代と僭称しようとする意見もあるが、同時に鉄器があることから、青銅器自身が一般的でなく、民衆の生活から少々遊離した存在であることから云っても、深く反省すべきであろう。」〔山内1932b:63〕。その一方で古墳時代という用語は使っているから、弥生式文化は古墳が暗示するような階級の分化がまだ未明なので民衆生活史の視点から論じることを促しているのであろう。

縄文文化とは質的に異なる弥生文化の社会的側面を強調する見解は、戦後しばらくたってから再浮上してくるが、文化人類学者の佐々木高明がその論理をわかりやすくまとめているので引用すると、「先端的な生産技術である水田稲作と非日常的で象徴的な外来の文化要素が相互に結びついて、それらを統合のシンボルとする新たな社会的・政治的統合が、西日本を中心に生み出されてきたことが重要である。(日本列島に渡来した人々は、)新しい社会の編成原理や旧来のそれとは異なった新しい信仰や世界観などを同時にもちこんできたに違いない。新しい生産技術と新しい思想がセットになって、土着の縄文社会をゆるがし、水田稲作に基礎をおく新たな社会的・政治的統合は、各地で共同体のまとまりを強化し、その連合体をつくり、やがては小国家群を生みだすに至ったと考えられるのである」〔佐々木1991:338-339要約〕。

社会組織の変化や社会的・政治的な統合が、縄文文化と弥生文化の違いであるという考え方は、多くの研究者が潜在的に抱いている理解であろう。しかし、この点を強調した論考の多くは東日本の初期弥生文化を弥生文化と認めながら、政治的未成熟性についての評価は棚上げする傾向がある。それは、こうした基準に照らせばこれまで一般化してきた関東地方の弥生中期前半までを弥生文化に含める理解を変更しなくてはならなくなるからにほかならない。

この問題については、林謙作が東日本の弥生文化前半期に代表される文化を「<sup>エビ</sup>続縄紋」という文化概念を設けて縄文文化でも弥生文化でもなく、たんに稲作を始めた縄文人の文化とみなし、生産や社会関係の転換を意味するものではないという解決方法を示している〔林1987:55〕。

## (2) 近年の動向

### 1 イネのイデオロギー

林と似た立場に立つ藤尾慎一郎は、水田稲作をたんに経済史的側面で評価することから脱し、環

濠集落の形成などにみられる社会的側面の転換に加えて、木偶や鳥形木製品を用いた祭祀をおこなうというイデオロギーの質的転換がイネに加えられたことを重視する〔藤尾 2003・2011〕。したがって、イネの質的転換が認められない東北地方北部の水田稲作や、関東地方などの中期中葉以前の文化は弥生文化と認めない。東日本まで含めて議論することによって、これまで弥生文化の社会的側面を重視する論者がうすうす気づいていた矛盾を鋭く突いたものと評価できよう。

しかし、時代区分の指標は時代性を反映していると同時に単純でわかりやすいことが求められる。水田稲作という同じ現象に「目的」や「目指すもの」の違いという思惟的な価値判断を要求する指標は、客観的でだれにでもわかる基準とはいえない。したがって、筆者は弥生文化の定義は佐原と金関のものでよいと考えるが、誰もが認める縄文文化と弥生文化の違いは農耕とのかかわり方の違いであることを踏まえよう。①「食糧」という字に込めたメジャーフードあるいは「本格的な農耕」としての栽培植物のとらえかた、②そしてそれが縄文時代の農耕とどのような質的な差があるのか、ということである。その追究にも価値判断がともなうので、時代区分と歴史的评价、歴史叙述はある程度切り分けることも必要かと思うが、この点についての歴史理論に照らした説明は今後の課題としたい。

## 2 縄文系弥生文化の再評価

筆者は遠賀川文化や宮ノ台式以降の文化など、大陸に系譜の求められる農耕文化要素を主軸として構成された弥生文化を「大陸系弥生文化」と呼んだ。それに対して、条痕文系文化など、縄文的な文化要素が多く認められ、政治的・社会的現象が希薄な弥生文化を「縄文系弥生文化」と呼んだ。これは山内の指摘である弥生文化の三要素のとらえ方を支持した結果である。<sup>(1)</sup>

しかしそれはたんに山内の説に従っただけでも、従来の時代区分にそのまま乗ったわけでもない。弥生文化という農耕文化が縄文文化を変容させ、また縄文系文化の農耕文化との共生のありようがきわめて多様であるという弥生農耕文化のダイナミズムの根源を知りたかったからである。それはとくに東日本でより顕著であった。

## ②……………東日本の弥生文化

### (1) 弥生再葬墓と社会

#### 1 再葬墓の時代

弥生文化の研究の黎明期において、東京府下では弥生式土器とともに竪穴住居跡が発見されていた。その後も久ヶ原遺跡で多数の竪穴住居跡が中根君郎らによって調査されるなど、東日本の弥生文化の生活史は、いろいろな方面から明らかにされていた。ところがそれは弥生後期の現象であり、前半期となると最近まで「東日本における最初の農耕文化の内容は、じつはこの再葬墓を通じて知ることができるだけで、生活のあとをたどれるような集落など「生きた文化」の実態は、まだよくわかっていない」〔金関・佐原 1975：39-40〕<sup>(2)</sup> というのが実態であった。

東日本の初期弥生文化に、複数の大型の壺をおさめた土坑の出土する遺跡があるのは戦前から知

られていた。そのひとつである茨城県筑西市女方遺跡は、発掘をおこなった田中国男によって農耕祭祀に関係があるのではないかとされていた。こうした遺構が再葬墓だと判明したのは戦後のことであるが、女方遺跡の土器は山内清男によって縄文土器編年に接続され、関東地方最古の弥生土器の編年的位置が与えられている。

しかし、これらの土器群が弥生土器であること、すなわちそれらが使用されたのが弥生時代であることの証明は、大型壺の増加という一点を論拠とするのみであり、集落の実態が分からないことにはそれも予断にすぎなかった。また、東北地方中部以北にくらべても粗製土器の数などは皆無に近い状態で、弥生文化とみなすうえでの根本的な指標を欠いていた。再葬墓＝弥生文化という、いわば自明とされた論理が独り歩きしていたのが1970年代までの研究状況であった。したがって、再葬墓が弥生時代の文化であることを問い直す必要に迫られていたのである。

## 2 再葬とその背景

1980年代になると、この問題を考えるうえで重要な遺跡の調査と研究がおこなわれた。1981年、群馬県藤岡市沖Ⅱ遺跡から再葬墓とともに遺物包含層が検出され、大型壺を含む数多くの壺形土器が大型の打製石鍬を多数伴って検出された〔荒巻・若狭ほか1986〕。ほぼ同じころ、中村五郎によって東北地方南部にまで遠賀川式土器とそれに併行する弥生土器が存在していることが確認され〔中村1982〕、沖Ⅱ遺跡の土器もこれらは弥生前期にさかのぼるので、これまでの自明の論理という制約の範囲内ではあるが、関東地方にも弥生前期が存在していることがようやく明らかになった。

竪穴住居などをともなう集落遺跡がほとんど検出できないことにかわりはなかったが、なんらかの社会状況によって分散居住を余儀なくされた小集団が祖先祭祀のために築いた共同の墓地であり祭祀の場が再葬墓だ、と石川日出志が論じたのは大きな進展であった〔石川1999〕。つまり、再葬墓はそれを取り巻く当時の社会的な状況が生み出した産物であることとらえることによって、問題の核心に近づいたのである。

分散居住現象と再葬の発達が関連しているらしい同じような状況は、縄文中期末から後期初頭にも見出せる。その時期の再葬は、房総地方と東北地方北部という離れた地域で認められる。このような同時多発的、あるいは時代を隔てて繰り返す現象の共通の要因として、筆者は気候変動を想定した。中部高地から南東北地方に分布する大型壺を多用した弥生時代の再葬墓を弥生再葬墓と名付けたが、そこにみられる文化要素の多くが縄文晩期の中部高地地方に求められることにより、分散居住を促した社会的な要因の一つが縄文晩期以来の寒冷化であり、再葬墓は分散居住にともなう集団の結合の弛緩を未然に防ぐために機能したのではないかと考えた〔設楽2008〕。

## 3 弥生再葬墓と生業経済の問題

したがって、弥生再葬の役割を通じてみた集団間の関係からすれば、弥生再葬墓の社会は祖先祭祀によって緊密に結びついた分散小集団という縄文時代晩期の集団関係、社会関係をほぼそのままに維持しているといつてよい。

それでは、弥生再葬墓とその時代の文化は縄文時代の文化と比較して何がどのように変化しているのだろうか。小林青樹は分散居住の背景に居住域の移動を想定し、その原因を焼畑といった農

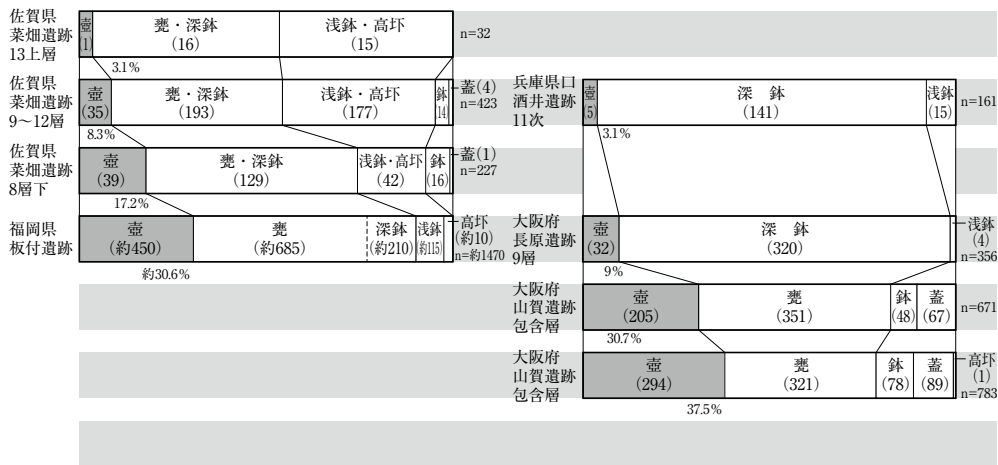


図1 九州～北関東地方における縄文晩期～弥生中期の土器組成の変化[設案 2008]より

耕の採用に求めた [小林ほか 2003:47]。この仮説を検証するためには、具体的な資料の分析が求められるところであるが、沖Ⅱ遺跡を加えた遺跡の近年の発掘調査によって問題の解明が進んだ。

まず土器の組成であるが、沖Ⅱ遺跡の遺物包含層では、壺形土器が全体の20%に達している。現在この地方で最も古い弥生土器とされているのは、沖式直前の如来堂式であるが、そこにも一定量の壺形土器が存在している。縄文晩期終末の氷Ⅰ式土器が出土する長野県茅野市御社宮司遺跡では、壺形土器の比率が2.5%にすぎない。詳細な分析は今後の課題とせざるを得ないが、沖Ⅱ遺跡の比率の増加は大きな変化といえるだろう。その比率は北部九州でいえば佐賀県唐津市菜畑遺跡8層下の板付Ⅰ式に、近畿地方では遠賀川式土器の初期の段階ころに、東海地方では弥生前期の樗王式といった具合に、各地における弥生時代の開始期の比率とほぼ一致している (図1) [設案 2005b: 234-135]。

かつて、弥生時代は「弥生式土器の時代」とされていたが、佐原は縄文土器と弥生土器が製陶技術のうえから截然と区別できないことにより、その定義を排した<sup>(3)</sup>。「農耕が本格化した時代」とあ

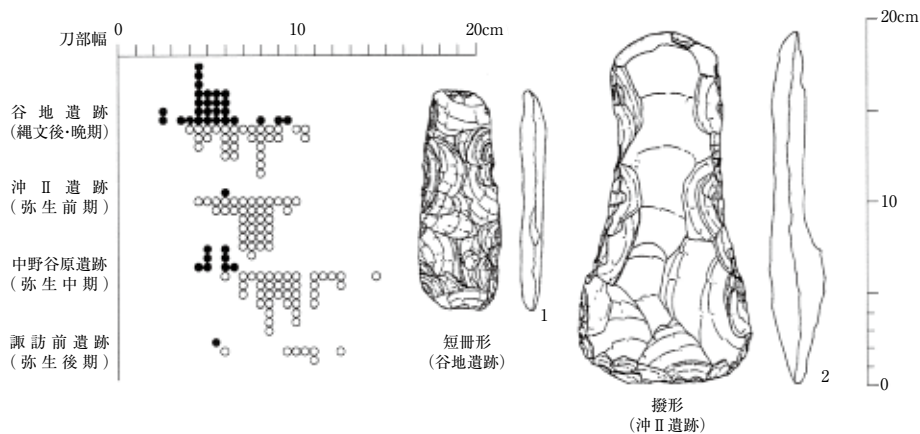
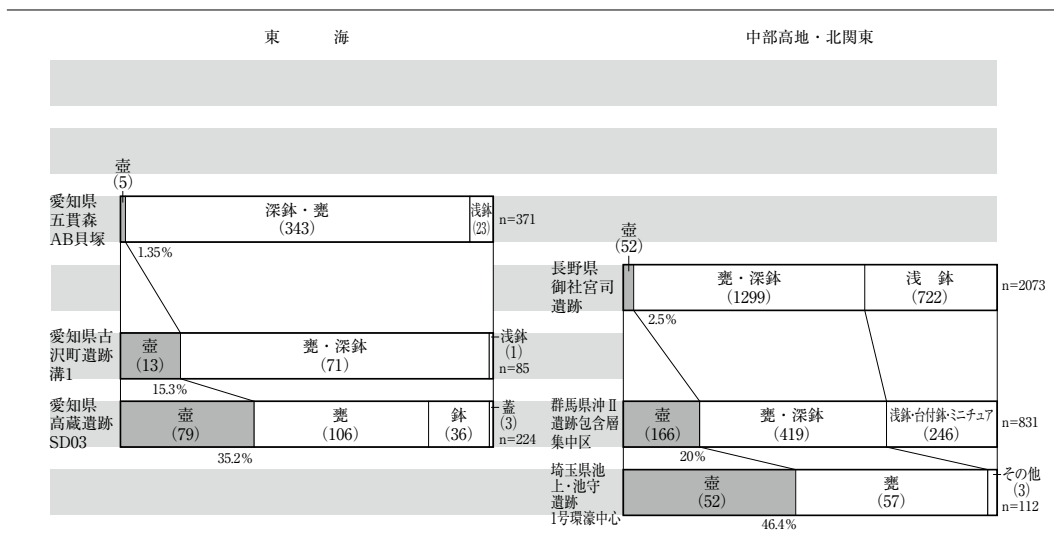


図2 北関東地方における打製土掘具の大きさの変化[設案 2008]より



らためて定義したのだが、それによって土器の時代区分に果たす役割の重要性が失われたわけではない。穀物貯蔵の大型壺を弥生時代の指標とする意見もあるし [岡本 1966 : 434-435, 中村 1988 : 8-11], 各種の壺形土器を伴う組成内容の変化が生活の変化を反映しているのではないかという推測も重要であるからにほかならない。

沖II遺跡からは大型の石鍬が多量に出土した。石鍬は、それに続く弥生中期前半の群馬県安中市中野谷原遺跡からも多量に出土しているし、後期にも大型の石鍬が出土する。長野県域の伊那谷で弥生後期に石鍬が多量に用いられており、陸耕と結び付けられて考察されたのは周知のことである [松島 1964]。

沖II遺跡と中野谷原遺跡の打製土掘具に縄文後・晩期の群馬県藤岡市谷地遺跡と弥生後期の群馬県吾妻町諏訪前遺跡の例を加えて分析したところ、短冊形の打製土掘具は刃の幅を変えずに激減するのに対して、撥形のそれは増加傾向のなかに石材を頁岩やホルンフェルス(谷地)から凝灰岩(沖II), そして粘板岩(中野谷原)へと扁平な素材を取りやすいように変化させつつ大型化していく傾向を見出した(図2) [設楽 2005b : 131]。中野谷原遺跡から出土した横刃形石器を顕微鏡観察した高瀬克範によって、Bタイプというイネ科植物の切断などによってできる特徴的なポリッシュが検出されたこと [高瀬 2004a] も、打製土掘具の変化が穀物栽培によるものである可能性を高めている。

初期弥生時代の東日本では、土偶の性格が変化していることも重要である。縄文時代の土偶の大半が成熟した女性像であることと、縄文晩期以前はほとんど墓に伴わないことから、その役割は生命の誕生を担うものであったことが推察される。これに対して弥生時代になると墓に副葬されたり土偶形容器という蔵骨器として弥生再葬墓に納められるようになる。土偶形容器は男女一対の偶像であることを基本としているが、これは男女協業という農耕社会の生業体系に起因するものと考えられる。土偶の性格が、農耕文化の影響によって変化したのであろう [設楽 2007]。

弥生再葬墓地帯では、集落の規模やそれを支える農耕の生産性の低さに規定されて、縄文晩期以来の社会状況にとどまりながらもそのなかで弥生文化への転換を経験していったのであり、低地において大規模な協業を必要とし規模の大きな拡大再生産を可能とする灌漑を伴う水田稲作より

も、河岸段丘上などの小規模な水田耕作も加えた畠作を選択していったのではないだろうか〔設案2008：301〕。これは東日本で畠作を主な生業とする文化が成立する一つの仮説である。

## (2) 西関東地方の農耕の実態

### 1 中屋敷遺跡の発掘調査

では、この仮説にとって肝心の穀物の検出状況はどうなっているのだろうか。これについて大きな進展が二つあるが、一つは神奈川県大井町中屋敷遺跡の発掘調査であり、もう一つはレプリカ法により土器の表面における穀物圧痕の同定が進展したことである。

足柄平野を望む台地にある中屋敷遺跡は、土偶形容器が出土した遺跡として早くから知られていた。足柄平野との比高は50mをはかる。1999年から2004年に昭和女子大学によって発掘調査され、土坑が17基検出された〔小泉ほか編2008〕。土坑のほとんどが弥生前期後半であり、そのうちの8・9号土坑から穀物の炭化種実が検出された。

穀物の炭化種実はとくに9号土坑から多量に出土したが、それらの種類と個体数はアワ炭化胚乳が重量換算で2000点弱、イネ炭化胚乳393点、キビ炭化胚乳26点であった。縄文後・晩期に利用率が高まるトチノキの炭化種皮やサルナシの炭化種子も伴出しており、他の土坑ではクリの炭化材が出土しているので、クリの果実の食用としての利用も想定されている〔佐々木2008〕。中屋敷遺跡の土器群は壺形土器が一定量加わっているが、それを含めて東海地方の条痕文系土器の影響が強く及んでいるのが特徴である。

### 2 レプリカ法による種子圧痕の同定

土器の表面に認められる植物種実の圧痕を型取りして種を同定する研究は、デンマークで1940年代に土器破片の表面を詳細に観察して種子の疑いのある圧痕をすべて粘土で型取りし、顕微鏡で観察して農学者が同定する徹底した方法により実践された。これにより、蔬菜類を含む農作物の歴史を克明に描く実証的な研究が進展した〔佐原1975：122〕。日本では山内清男が1920年代に土器の表面の圧痕を型取りし、農学者によってそれがイネと同定されたのが〔山内1967〕、世界的に見ても先駆的な例であろう。

この研究は、丑野毅により土器製作における技術の解明に応用するべく、シリコンという新たな印象剤を用いておこなうレプリカ法で再開された〔丑野・田川1991〕。中沢道彦は東日本への農耕文化の波及という問題の解明に向けて、丑野とともに農学者の松谷暁子を加えた共同研究により山梨県韮崎市中道遺跡の縄文晩期終末土器の圧痕の分析をおこなったが、それをきっかけとして先史日本における植物利用の歴史的解明は新たな段階を迎えたといつてよい〔中沢・丑野1998、中沢ほか2002〕。その後、レプリカ法を用いた先史時代の植物利用のあり方を探る分析は、地域や時期を問わず進展が著しい〔小畑2011、中山2010、山崎2005など〕。

筆者らは弥生再葬墓地帯の文化変容が農耕化に起因する仮説を立てたが、それを検証するために高瀬克範とともにレプリカ法を用いた土器圧痕の分析をおこなって穀物の有無を調査した。対象は北西関東地方であり、群馬県の2遺跡、埼玉県の2遺跡、神奈川県の6遺跡である。まだ分析した遺跡の数は少ないが、結果と課題を摘要したうえで現状での理解を示しておこう。<sup>(4)</sup>



調査の対象は、縄文晩期後半～弥生中期前半の資料である。摘出された穀物の圧痕は、アワ、キビがほとんどであり、イネはきわめて少ない。もっとも古いのは神奈川県秦野市下大槻峯遺跡や同市中里遺跡の縄文晩期終末の氷Ⅰ式新段階の土器であり、アワ、キビの圧痕が検出された。神奈川県や埼玉県域の弥生前期後半の資料からもアワ、キビが検出された。石鍬や横刃形石器を観察し、農耕に使用したと推定した弥生中期前半の中野谷原遺跡では、アワが4点、キビが9点、イネが3点検出された。一方、神奈川県川崎市下原遺跡など安行3d式以前、すなわち大洞C<sub>2</sub>式以前の資料からはいっさい穀物圧痕は検出されなかった。

下原遺跡の安行3c・3d式土器の胎土からは、イネのプラント・オパールが検出されている。これに対してイネを含む穀物の圧痕はまったく認められなかったのをどのように考えればよいのか、今後分析事例を増やしていくとともに、圧痕がいかんして形成されるのかをタフォノミーの視点から研究していく必要がある。長野県域において、縄文晩期終末の氷Ⅰ式土器からアワ、キビの圧痕が確認された事例が増加しているが〔遠藤・高瀬 2011, 中沢 2012〕, 神奈川県域にも広がりを見せ、氷Ⅰ式の分布圏では雑穀栽培が普及していたことが推測できる<sup>(5)</sup>。弥生前期でも沖Ⅱ遺跡でアワ、キビなどの圧痕が検出されており〔遠藤 2011: 421〕, 神奈川県や埼玉県美里村如来堂A遺跡と同様の結果が出た。

以上を総括すれば、縄文晩期終末から弥生中期前半の北西関東地方ではアワ、キビによる畠作がおこなわれていた可能性が高い。それに若干のイネが伴うが、稲作が水田でおこなわれていたのか陸稲として栽培されたのか不明である。山梨県韮崎市宮ノ前遺跡の弥生前期の水田跡を積極的に評価すれば、<sup>(6)</sup>段丘あるいは谷での小規模な水田稲作も組み合わせられていた可能性がある。

### 3 北西関東地方における穀物の由来

では、これらの穀物はどのようにして出現したのであろうか。まず、日本列島全域で、イネ、アワ、キビの出現の時期をみてみよう。イネについては、熊本県本渡市大矢遺跡の縄文中期、阿高式土器と、熊本市石の本遺跡の縄文後期、鳥居原式土器についた粉状の圧痕が古い例として報告されている〔山崎 2005〕。中沢道彦は、大矢遺跡例は粉に特有の顆粒状組織が明確ではないとし、石の本遺跡例はイネである可能性は否定できないが判断を保留している〔中沢・丑野 2009: 38〕。確実な粉圧痕をもつ土器は、島根県飯南町板屋Ⅲ遺跡の突帯文期初頭、夜白Ⅰ式をさかのぼる前池式土器がもっとも古い<sup>(7)</sup>〔中沢・丑野 2009: 37〕。

東日本でもっとも古いイネの資料は、長野県飯田市石行遺跡の女鳥羽川式土器に印された粉圧痕である〔中沢・丑野 1998: 13〕。女鳥羽川式は5段階に区分される浮線文土器の第1段階、東北地方では大洞A<sub>1</sub>式、近畿地方では口酒井式に併行する<sup>(8)</sup>。それに次ぐ時期のイネの資料は同じ石行遺跡の氷Ⅰ式～Ⅱ式とされた微妙な時期のものがあるにすぎず〔遠藤・高瀬 2011〕, 弥生前期を待たねばならない〔中沢 2012: 88〕。

雑穀のうちアワは確実なところでは、鹿児島県曾於市上中段遺跡の夜白Ⅱa式併行期の突帯文土器の圧痕資料とされる〔中沢 2012: 80〕。キビは滋賀県安土町竜ヶ崎A遺跡、突帯文期の長原式土器の内面に付着した炭化種実がもっとも古く〔宮田ほか 2007: 258〕, 弥生前期の遠賀川式土器と同時期である可能性が高いとされていたが、近年、愛知県豊橋市大西貝塚や東京都新島村田原遺跡

表1 土器編年(網掛けは弥生時代)

| 北部九州                         | 中国      | 近畿          | 東海           | 中部高地       | 南関東       | 北東北                   |
|------------------------------|---------|-------------|--------------|------------|-----------|-----------------------|
| 長行Ⅰ式                         | 前池式     | 滋賀Ⅳ式        | 西之山式         | 佐野Ⅱa式      | 安行3d式・前浦式 | 大洞C <sub>2</sub> 式(古) |
| 夜白Ⅰ式                         | 津島岡大式   | 口酒井式        | 馬見塚F地点式      | 佐野Ⅱb式      |           | 大洞C <sub>2</sub> 式(新) |
| 夜白Ⅱa式<br>板付Ⅰ式・夜白Ⅱb式<br>板付Ⅱa式 | 沢田式     | 船橋式         | 五貫森式         | 女鳥羽川式      | 桂台式       | 大洞A <sub>1</sub> 式    |
|                              | 遠賀川式(古) | 遠賀川式(古)・長原式 | 馬見塚式         | 離山式/氷Ⅰ式(古) | 千網式/荒海1式  | 大洞A <sub>2</sub> 式    |
| 板付Ⅱb式                        | 遠賀川式(中) | 遠賀川式(中)・水走式 | 遠賀川式(中)・櫻玉式  | 氷Ⅰ式(中)/(新) | 荒海1式/2式   | 大洞A <sub>1</sub> 式    |
| 板付Ⅱc式                        | 遠賀川式(新) | 遠賀川式(新)     | 遠賀川式(新)・水神平式 | 氷Ⅱ式        | 荒海3式/4式   | 砂沢式                   |

で五貫森式, 桂台式という夜白Ⅱa式—大洞A<sub>1</sub>式併行期にさかのぼる圧痕資料が確認された〔中沢2012: 78-79〕。

このように, 突帯文土器期をさかのぼる穀物の実例は, 確実な資料ではいまのところ確認することができない。イネの出現時期が雑穀より若干さかのぼるものの, 日本列島でこれらはほぼ一斉に登場したとみてよい。とくにアワとキビは夜白Ⅰ式以降となるので, このような穀物複合は水田稲作の導入や土器様式の変化を含めて朝鮮半島との関係のなかから生じたのであろう。東日本における穀物資料はキビを除けば西日本よりも出現が遅れる。したがって, 北西関東地方における穀物は, 朝鮮半島からの体系的農耕の導入の影響によって出現したのであり, 在地における縄文農耕の系譜を引いたものではないことが指摘できる。

筆者はかつて浮線文土器が突帯文土器と密接な関係のなかから生まれた土器様式であることを論じた〔設楽1982: 365〕。浮線文第2段階の離山式土器は, 東海地方から北陸地方にいたるまで長野県域ときわめてよく似た特徴をもつ土器として分布を広げる。氷Ⅰ式古段階の土器を含めて, 近畿地方では長原式土器や馬見塚式土器とは様式の構造をまったく異にするものの, しばしば供伴するように親和性が強い。このような関係性にもとづいて中部高地やさらに北西関東地方にまで西日本からアワ, キビがもたらされたのであろう。

### (3) 東北地方北部の農耕文化

#### 1 北部九州との交流

筆者は小林青樹とともに, 板付Ⅰ式土器の成立に東北地方中～北部の亀ヶ岡式土器が影響を及ぼしていることを論じた〔設楽・小林2007〕。それは夜白Ⅱa式と大洞C<sub>2</sub>/A<sub>1</sub>式の交流であるが, その前後に浮線文土器がそれまでの分布圏を打ち破るように西日本一円に広がることはすでに小林が明らかにしていたことである〔小林1999〕。この移動現象は, 当時縄文文化を高度に発達させていた亀ヶ岡文化など東日本の文化圏が, 農耕化という北部九州などで生じた新たな文化の動きに敏感に反応した結果にほかならない。そのリアクションが, 弥生前期の砂沢式期における青森県域での水田や抉入片刃石斧の受容, 管玉や炭化米の出現, 靱土器の増加など, 関東地方ではみることのできない西方系文物の導入となってあらわれたのではないだろうか。<sup>(9)</sup>

いずれにしても, 中部高地, 関東地方の初期弥生文化とはおよそ異なる稲作文化への志向の高さをどのように評価していくのかは今後の大きな研究課題である。要因の一つとして, 先に指摘し

---

た縄文晩期終末に北部九州に直接移動した土器から推測できる異文化接触とそのリアクションが考えられるが、そこに時間差がありすぎるとすれば、砂沢式期に壺甕ともに遠賀川式土器に近いという土器組成の成立にはたした日本海ルート<sup>(10)</sup>の文物の動きに再び注目する必要がある。

## 2 集落の再編成と拡大再生産の動き

その一環として、高瀬が秋田市地蔵田遺跡の集落を分析して論じたような、生業活動の諸変化に応じた集落の再編成の動きは注目に値する [高瀬 2004b:144-213]。つまり、弥生再葬墓地帯の初期弥生文化は小規模分散化したままで畠作を取り入れていったように、社会組織の改変は希薄なのに対して、東北地方北部の一部の地域では社会組織の改変をもはかり、水田稲作を取り込んでいった可能性がある。

青森県弘前市砂沢遺跡の弥生前期の水田が緩傾斜地の地形勾配にあわせて築かれたものであるのに対して、青森市垂柳遺跡の弥生中期中葉の水田域は平坦な地形面で広い耕地を確保できるようになっている。垂柳遺跡の耕地面積が広いのは、このような土地条件を選択したからであろう。水路跡からは木製鋤の未成品や盾と思われる板とともに、搬入された南御山2式系の壺形土器が出土している。南御山2式土器は会津地方を中心に分布し、仙台平野にまで影響を及ぼした。垂柳遺跡でこの時期に大規模な水田が造営された背景には、南東北～中東北地方という水田稲作先進地帯からの技術的な関与のあったことがうかがえるのである。これは、とりもなおさず拡大再生産を志向する農耕に踏み出していたことをうかがわせる。

## 3 もう一つの弥生文化

このようにみえてくると、東北地方北部でも北部九州に端を発する農耕文化形成の現象を受けて、農耕化の道を歩んでいったことが分かる。さらにそれが中部高地、関東地方とは異なる道を歩んでいったことも、列島内の農耕文化形成の多様性や選択の独自性をうかがううえで重要である。

その一方で、弥生中期中葉の温暖な気候に支えられて、南東北～中東北地方の先進的農耕技術を取り入れつつ農耕生産の発展をはかっていく方式は、当時の西日本における集落の肥大化や東日本の各地にみられる遠隔地との交通関係を整えつつ低地の農耕集落を整備していった状況 [石川 2001] と連動している。

このように、東北地方北部は独自性を発揮する一方で、日本列島で広域に連動した文化変化と共通の動きも認められるのであり、これは弥生文化という大きな枠のなかでの同調性といわざるをえない。東北地方北部が弥生後期に続縄文文化に包摂されていったのは、寒冷化という気候変動による外的な変化であり、それ以前に弥生文化と同調した内的な動きのあったことを評価するべきであろう。

### ③……………「農耕文化複合」としての弥生文化論

#### (1) 縄文農耕と弥生農耕文化の違い

##### 1 縄文農耕の特質

前章で、北西関東地方を中心に農耕文化の形成過程を述べてきた。そこではアワ、キビの雑穀をおもに栽培していることと、それに規定されるかのように文化要素の多くが農耕文化的変容をきたしていることを論じた。文化要素の農耕文化的変容が総体的に生じていることが重要であるが、そのことを議論する前に、縄文時代の農耕と弥生時代の農耕の違いに触れておきたい。

縄文時代の栽培植物は、早期にすでにアサ、エゴマ、ヒョウタンなどが知られているが、嗜好品的な種類の植物が多い。問題は主食としてまかなえる穀物類とマメ類、とくに本稿とのかかわりでは穀物の存在と様態である。前章で整理した確実な穀物および圧痕資料にもとづき農耕の様態も含めていうと、縄文農耕には以下の特色が指摘できる。

①全体的傾向としては嗜好品の植物が多い。②主食をまかないうる栽培植物のうちマメ類とヒエは存在するが、穀物は縄文晩期終末の突帯文土器をさかのぼらない。③一つの遺跡で、栽培穀物が多量に出土することはない。④一つの遺跡で、複数種類の栽培穀物が出土することはまれである。⑤灌漑技術を伴うような、集約的な穀物栽培は認められない〔設楽 2009:5 を一部改変〕。クリやトチノキの管理で手いっぱいであり、手間暇のかかる集約的な穀物栽培に積極的に乗り出すわけにはいかなかったのであろう。

##### 2 文化要素の総体的な変化

これに対して弥生文化の農耕は、水田稲作とアワ、キビの雑穀栽培からなる体系的なものであり、それに応じて他の文化要素が農耕文化的な変容をとげている。つまり、弥生文化は様々な文化要素が連鎖的に農耕と関係している「農耕文化複合」といってよい。現象的には、食糧に農作物が多くなる、石器や木器に農具が多くあらわれる、農具をつくるための石器が増える、大型壺を含む各種の壺形土器の比率が増える、灌漑施設を伴う水田や畠がつくられ、それにより狩猟や漁撈の比重が減ったり専門化していく、生産の儀礼が農耕儀礼を基軸に展開するなど、生活のすみずみに農耕文化の影響があらわれてくる。農耕が文化のごく一部をなすにすぎない縄文文化と対照的である。

農耕文化複合という概念は文化人類学で提起されたものであり、一連の、あるいは多数の文化要素があつまって構成されている全体をさす〔大林 1987:672〕。中尾佐助は次のように説明している。「生きていくうえでの技術や習慣、規範などが総合された“文化”のうち、農業に関係するものだけでも、作物の品種・栽培技術・加工技術・宗教儀礼・農地制度など異質のものが必ず集まって、それらが相互に絡み合った一つのかたまりとみられる。それを“農耕文化複合”と呼ぶ習慣になっている」〔中尾 1966:11-13〕。これは J. スチュワードが提起した「文化核心」(culture core) の概念に近い〔Steward 1955:37〕。文化核心とは、「その文化のもつ主要な生業活動を中心にして、相互に機能的に連関しあった一群の社会的・政治的・宗教的特色が、重要な機能を演ずるもの」であ

る [佐々木 1971 : 16-17]。文化人類学のフィールドで観察できるような複合性を考古資料から満足に抽出することは困難かと思われるが、縄文農耕と弥生農耕文化を区別するうえでも文化総体として分析し、理解する努力を注ぐ必要がある。

弥生文化が農耕文化複合であるという見解は、古くからみられた。森本六爾は、日本古代文化の構造を、ある部分が他の部分と関係しているエンジンにたとえ、日本列島の農業の起源を文化要素の複合 cultural assemblage として理解しようとした [森本 1935 : 1]。都出比呂志によると、この考え方の芽生えはこのころすでにヨーロッパで遺物や遺跡の諸型式の複合によって文化を考古学的にとらえようとする考えが定着しはじめていたことに加えて、赤堀英三が文化人類学の「文化複合」概念をウィスラーの Man and Culture (1923) の翻訳を通して日本に紹介したことをきっかけにしているのではないかと推測している [都出 1988 : 137-138]。

さらに、「弥生文化を特徴づけるさまざまな要素はすべて農耕生活と関連し、それに支えられて存在し、また変化発達した」 [近藤 1962 : 158] というのは極論にしても、「支石墓や織布、ある場合には糸などが大陸から伝えられたのは、すでに縄文晩期であったが、それらが部分としてではなく、一定の秩序をもった組織的な農耕文化として定着したときに、日本人が米作民族して歩む方向が決まった」 [和島 1974 : 138] という理解は、言葉こそ用いないが弥生文化を「農耕文化複合」ととらえる理解が定着していたことを物語っている。

このような視点に照らせば、前章で論じたように、北西関東地方では縄文晩期終末から弥生前期に農耕文化の影響を受けて生業、墓制、精神文化などに多大な変動をきたし、縄文文化の範囲におさまりきらない文化へと変容していることに注目せざるをえない [設楽 1995 : 81]。中部高地や北西関東地方の場合、氷Ⅰ式あるいは離山式の段階にアワ、キビの土器圧痕が報告されているが、まだこの段階は壺形土器の比率が低く、石鋤も大型化をとげていない。アワ、キビの栽培は来るべき弥生文化の「先駆け」 [佐原 1995 : 111-112] ととらえて、壺形土器が2割程度になるとともに東海地方の条痕文系土器の影響が強まり、石鋤が大型化し、土偶形容器が成立する氷Ⅱ式、如来堂式の段階から弥生文化の時代と認識したいが、大型壺が出現するなど土器組成が大きく変化する氷Ⅰ式の終末 [中沢 2012 : 87] が微妙なところであろう。

## (2) 北西関東地方の弥生農耕文化複合

### 1 弥生農耕文化複合の多様性とその由来

弥生時代の農耕文化複合も、けっして単一ではない。日本列島の初期農耕文化の生業体系をみると、そこに二つの類型の存在を指摘することができる。

佐賀県唐津市菜畑遺跡<sup>(11)</sup>では、水田関連遺構、イネとアワの穀物、各種の蔬菜類と果樹の種子、水田雑草とともに畝雑草の種子が検出されている。一方、堅果類が豊富に検出され、魚骨はサメ、エイ、マイワシ、ボラ、マグロ、クロダイなど、獣骨もノウサギ、イノシシ、ニホンジカ、ムササビ、タヌキ、イルカなど多くの種類が出土している。

これに対して、福岡市板付遺跡の雑草の花粉は水田雑草に集中する。大阪府和泉市・泉大津市池上曾根遺跡では、5種類の栽培植物と32種類の採集植物が検出されている。しかし、種類は豊富であるものの、イネとヤマモモ、マクワウリが他を圧倒している。魚類もマダイが突出し、狩猟動

物ではイノシシが圧倒的に多い。

甲元眞之は、上述の二つの弥生農耕文化複合類型を、「網羅的経済類型」と「選別的経済類型」と呼び分けた〔甲元 1991：31-32〕。縄文文化の生業体系は、網羅型の典型である。では、弥生文化の農耕における網羅型は、縄文文化の系譜を引いたものだったのだろうか。その答えは、菜畑遺跡の農耕文化の故地である朝鮮半島南部における農耕のあり方のなかにある。朝鮮半島南部の農耕の特質は、水田稲作と畠作が併存していることであり、むしろ畠作が主体をなしている可能性が指摘されている〔後藤 2006：311〕。畠跡は、慶尚南道晋州市大坪里遺跡の魚隠地区や玉房地区で多数検出されており、細長い畝が何本も連なる大規模な畠跡も多い。無文土器前期の畠作物としては、アワ、キビ、オオムギ、コムギ、マメ類があげられる〔安 2007：314〕。

水稲耕作を主体とした華中・華南では農耕民に一般的である選別型経済類型をとるのに対して、華北では雑穀栽培が展開し、動物の選別化である家畜化も顕著ではない。網羅型をとるのは、畠での雑穀栽培の際、連作障害を回避するために作物のレパートリーを豊富にしておかなくてはならないからだとされる〔甲元 2008a：39〕。朝鮮半島南部地域では、稲作に特化することはなく畠作による雑穀栽培を推し進める華北型の農耕文化類型が基盤をなしていたのであろう。

このようにみえてくると、弥生農耕文化の母体となった朝鮮半島南部の農耕文化類型は、華中・華南型と華北型という二つのタイプの複合型であることが指摘できる。これは弥生文化における農耕受容の選択の幅があらかじめ広がったことを物語るものであり、菜畑と板付という二つの類型が所与のものとしてあったことがうかがえる。このうちの網羅型は、縄文文化という採集狩猟文化の伝統を受け継ぎながら、水田稲作と畠作を複合させた朝鮮半島南部の農耕文化複合を取り込んだ結果だ、と結論付けることができよう。

## 2 条痕文文化と畠作をめぐって

中部高地地方や西北関東地方の初期農耕文化において畠作を選択したのも、こうした多様性、選択の幅の広さを背景としている。中屋敷遺跡の穀物にアワやイネを主体としてキビが加わっているのは、畠の連作障害を回避するために網羅的生業類型を選択した結果であろう。またトチノキの種実や食料としてのクリ利用の可能性など、縄文文化の伝統的な食料をレパートリーに加えているのも、縄文文化的生業形態を温存しながら穀物栽培にシフトしていった環境適応を如実に物語っている〔佐々木 2009：140〕。

弥生前期の畠の跡は福岡県小郡市三沢蓬ヶ浦遺跡、徳島市庄・蔵本遺跡や三重県松坂市筋違遺跡などから検出されているが、いずれも畝が幾筋も並列した形態をなす。中部高地地方や西北関東地方の農耕文化複合の形成を考えるうえで、筋違遺跡から畠跡が検出されているのは重要である。それはこの遺跡が伊勢湾沿岸の一角に位置し、畠の時期をさかのぼるが離山式土器や氷Ⅰ式土器と関係の深い条痕文土器である馬見塚式土器も検出されているからである。東海地方では、馬見塚式～樗王式の土器からキビの圧痕が確認されている〔遠藤 2012：9〕。

かつて石川日出志は条痕文文化の石器組成を台地型とし〔石川 1988〕、関東地方の打製土掘具をそれと比較して農具と考え、関東台地の弥生前半期の農耕は陸耕が水田耕作をしのぐほどに本格化していたとした〔石川 1992：80〕。氷Ⅰ式に形成された壺形土器は、在来の深鉢を変容させたもの

に加えて、檜王式土器の影響を強く受けたものが認められる。それを手始めに関東地方にも壺形土器が弥生前期にかけて増加の一途をたどることはすでに述べたが、そこにも檜王式や水神平式土器の影響が如実に認められる。土偶形容器も条痕文系文化で誕生した。条痕文系文化の農耕の様態を考えてみれば、中部高地・関東地方の農耕文化複合は、条痕文系文化の強い影響のもとに形成されたといつてよい。

東海地方では、条痕文土器は遠賀川式土器の集落から一定量出土する。また、壺形土器や甕形土器の口縁部が外反の度合いを強めていくのは、遠賀川式土器との接触変容にほかならない。条痕文系土器はあらい条痕によって器面を調整するという、およそ遠賀川式土器とは異なる方法を用いてアイデンティティーを主張しながらも、ともに農耕文化を受容し農耕化をとげていった文化である。したがって、条痕文文化も弥生文化といつてよい。その影響下に農耕化を進めた中部高地・北西関東地方の初期農耕文化もまた弥生文化に包摂されるのであり、それは東北地方北部の農耕文化ともども、大陸の農耕文化に淵源をもつ農耕文化複合の汎列島の連鎖によって形成された。つまり、これらの変化の重要性は、それが大陸から体系的な農耕文化が導入されたという歴史の大転換を起点として生じた文化変容であって、縄文文化のなかから自然に生まれたものではない点にある。

レプリカ法による種子圧痕の調査はまだ途に就いたばかりであり、今後組織的な調査を要する。また、遺構の覆土とくに焼土のフローテーションも積極的に導入していくべきであり、予断が許される状況ではないが、近年蓄積されているデータからすると、北西関東地方の弥生時代の初期農耕は雑穀栽培を主体としていた可能性が高い。朝鮮半島の農耕文化複合のうちの、アワ、キビの雑穀栽培を集団関係の状況に応じて間接的に受容した結果ではないだろうか。

都出比呂志は、群馬県渋川市有馬遺跡のような畠と水田とを隣接してもち有機的に組み合わせた農法を水田・畑結合型と仮称し、長野県の伊那盆地や大分県の大野川流域の台地など弥生後期の畠の開発が水田とともに進展したケースを畑卓越型と仮称した [都出 1984 : 129-130]。弥生時代における畠の高度な技術力と重要性を認めたいうでの理解といえよう。また安藤広道は、南関東地方の弥生時代における栽培植物種子を分析して、台地の上で畠が大規模に展開していたというイメージに警鐘を鳴らしているが、それは宮ノ台式以降のことであってそれ以前の畠作を否定しているわけではもちろんないし、宮ノ台式期にも小規模な耕地を多数点在させ、それを頻りに切り替え、移動する畠作経営の姿をイメージしている [安藤 2002 : 51]。宮ノ台式期以前の畠作もそのような状況だったのだろう。

金関恕は佐原真とおこなった弥生文化の定義にある「食糧生産に基礎をおく生活」を「水稻耕作を主たる生業とする生活」と改めてよいとした [金関 1989 : 8]。たしかに弥生中期中葉以降、イネの栽培が卓越していく状況を踏まえれば一理ある。しかし初期の段階の雑穀栽培のありようから農耕文化複合の多様性と選択性を重視し、その後も列島のいたるところに畠の卓越する文化が存在していることを重視する立場からは、にわかに賛成することはできない。

### (3) 農耕文化と農耕社会

#### 1 農耕社会の成立

では、第1章で取り上げた佐々木の意見に代表される政治的統合のメカニズムを有した文化を弥

生文化と認めようという立場とこれまでの議論とはどのように関係し合うのであろうか。たとえばこれを関東地方にあてはめると、弥生中期前半までの縄文時代の社会的関係をそのままに維持している社会は、林流にいえば続縄文<sup>エビ</sup>であって、弥生文化は弥生中期中葉の神奈川県小田原市中里遺跡などで分散小集落が統合して農業共同体を築いた時点に始まるとせざるをえないことになる<sup>(13)</sup>。

しかし、北部九州の農耕社会の形成過程を分析した後藤直によれば、核となる集落や集団が中心となり地域内諸集団間の地縁的結合関係が創出される農耕社会の成立は弥生前期後半のことであり、それまでは縄文時代以来の小規模集団が、耕地や水利などの緊密な関係を他の集団との間に結ぶことなくゆるい集団関係のなかで小規模な農業経営をつづけていたという〔後藤 1986 : 155〕。

## 2 政治的社会と階級的関係の形成

弥生前期末～中期初頭は、あらゆる面で弥生文化の政治的成熟へ向けての画期であった〔禰宜田 2003 : 26-27〕。大型集落や人口の増加、農耕社会の成立もそうであるが、青銅器の本格的な導入と鉄器の受容によりいわゆる大陸系弥生文化が列島規模で大型の集落を形成していく時期である。とくに北部九州では渡来人の関与が、弥生文化成立期とは異なるかたちで顕著にうかがえるのであり、青銅器を副葬した個人の台頭から古墳時代へ向けての階級的関係の形成の起点はここに求めることができよう。

近藤義郎は日本の時代区分原理の展開を振り返ったなかで、技術の変化、経済の変化、政治体制の変化、さらに最後に社会構成体の変化という段階順序を追ってなされているとしたことと同じく、弥生文化は経済の変化によってはじまり、政治体制の変化によって古墳時代へと引き継がれるとした〔近藤 1986 : 21〕。

A M S 法による炭素 14 年代の較正によって、弥生早・前期が間延びし、それを受けた鉄器流入の時期の再検討によってそれが大幅に遅れることが議論にのぼっている。それを認めれば縄文的な集団関係が弥生時代の半分は続いていたのであり、弥生時代は時間的にも地域的にも多様で大きな変化を経ながら古墳時代へと移行していったとみなすべきで、激動の時代を評価するのに政治史的な視点を唯一の指標として論じることには無理がある。弥生時代の始まりは農耕文化複合の形成という経済史的区分で区切り、政治的区分で古墳時代と区切るのが望ましい。

## 3 伝統的文化の継承と伝統的社会との共生

藤尾は東北北部における弥生時代前半期の石器の供給体制が、縄文時代以来のそれを変えていないことを重視して、弥生文化的な生産と流通の成立という社会システムの整備を重視する〔藤尾 2011 : 169〕。しかし、松木武彦が述べるように西日本でも弥生前期の石器の生産と流通は縄文時代のそれとの間に質的な差異はなく、福岡県今川遺跡のような原産地直下型でブランド品を生産し、製品が半径 100km 以上に及ぶような専門生産が展開され、それが首長の権威の飛躍的増大に寄与するようになるのは弥生前期末以降を待たねばならない〔松木 2011 : 156-157〕。

長原式を園耕民と位置づけて、その後半には遠賀川文化と共存していながらも、たがいに異質の文化であるとするについてでも再検討の余地がある。長原式はキビの栽培を含む複合農耕をおこなっていた可能性が高く、大型壺を含む壺形土器の形成と組成比率の上昇(図 1)は弥生文化の影



響によったものである。伝統的縄文文化の系譜をひき、また棲み分けをしているとはいえ、遠賀川文化のなかに石棒祭祀が持ち込まれているなど共生共存関係は明らかである〔藤尾 2011: 160〕。遠賀川文化と接触する長原式期は弥生文化に包摂して考えるべきかもしれない。

神奈川県三浦半島の先端には、間口洞窟や毘沙門洞窟など漁撈民の集団が生活している。その技術体系は明らかに縄文系であり、半農半漁ではない通年の漁撈活動をおこなっている。農耕集落に取り込まれた農民的漁撈に従事する集団とは全く異なった技術系統に属する。しかし、彼らも農耕民から手に入れた弥生土器を用い、卜骨で占いをおこない、明らかに農耕民との間に共生関係を結んで暮らしている〔設楽 2005a: 322-323〕。環濠ももたないし、階級社会を形成しているわけでもないが、これらを弥生文化に含まない人は誰もいない。

## おわりに

日本列島で農耕文化複合が形成されてから前方後円墳が出現するまでの時代を弥生時代と呼び、その文化を弥生文化という。これが本稿の結論である。

日本列島で朝鮮半島南部から受容され形成された農耕文化複合は地域に応じて可変性に富むものであり、東日本で形成された条痕文文化、弥生再葬墓の文化、砂沢式文化などはいずれも遠賀川文化と同じ弥生文化ととらえてよいか疑問視されるほどである。しかし、条痕文土器は遠賀川式土器との交渉の結果生まれ、中部高地・関東地方の初期弥生土器は条痕文土器の強い影響によって形成されたし、砂沢式土器は遠賀川式土器の影響を受けながら形成されたという成立事情を考えたとき、続縄文文化と弥生文化の間の交渉のような異文化交渉とは一線を画すのであり、遠賀川文化と直接、間接の緊密な交渉の結果生まれた土器であり文化であることを重視したい。

こうした弥生文化の理解の仕方は、従来の考え方とさほど変わるところがない。一方、イネのもつイデオロギー的側面、社会性を弥生文化の指標として重視する意見では、これまで弥生文化としてくられてきた文化の多くをその埒外に追い出すこととなる。それは、これまでの弥生文化自体の枠組みの大きな変更であるのだから、弥生文化という用語を使うことはできないのではないだろうか。したがって、「板付文化」といった新たな名前を冠するのが筋だろう。

これは、本稿が弥生文化論の正統な継承者であることを主張するものではなく、これまでの弥生文化と同じ名称で論を進めると著しい混乱を招くと危惧するからに他ならない。こうした危惧を回避するには、弥生文化の農耕の様態を縄文文化の農耕と区別したうえで、全体枠を生活文化史的経済史的視点から「農耕文化複合」ととらえ、その後に階層分化にもとづく政治的社会的形成—農耕社会の成立—をすえる二段構えで弥生文化を理解する山内や和島、近藤の見解を再評価すべきではないだろうか。

### 註

(1)——「縄文系弥生文化」の概念については、さまざま批判を頂戴した。その批判に逐一こたえるのは本稿の趣旨ではないのでいずれあらためて論じることにする

が、一つ気になるのは「系」のもつ意味である。「系」にはいくつも意味があるが、筆者としては「系譜」ではなく「体系」の意味で用いた。文化の系統性を扱うこと

の多い考古学では、系はやはり系譜の意味で用いられることが多く、そのことの説明をいちいちしないと誤解されてしまうし、文法的に問題がないのかもつめていない。

(2)——これは関東地方から東北地方南部の実態であり、東北地方中部から北部については、伊東信雄によって炭化米や粃痕土器などが抽出されて、生活実態の解明が早くから進んでいた。

(3)——佐原も「しかし、基本的な器種の成り立ちを比較すると、差異を指摘することができそうである」[佐原 1975:121] として、食糧生産民の土器は壺・甕・鉢など数器種から成り立っていることなどをあげて、土器のもつ文化特性としての重要性に配慮をみせている。

(4)——詳細は本誌掲載の別稿を参照されたい。

(5)——千網式の分布圏での様相が今後の課題となる。国立歴史民俗博物館が 1989・90 年におこなった千葉県荒海貝塚の千網・荒海式土器の圧痕を分析しているが、結果は近刊の報告書に譲る。

(6)——水田跡であることに否定的意見もある。

(7)——鹿児島県さつま町水天向遺跡の縄文後期末とされる土器の粃痕資料 [小畑・真邊 2011] も、土器の時期の特定が困難だという意見もある。

(8)——青森県八戸市風張遺跡の縄文後期末～晩期にさかのぼるとされた炭化米の 2 粒を A. ダンドレアが AMS 炭素 14 年代測定し、2540 ± 240 B.P. と 2810 ± 270 B.P. という結果を出している [D'Andrea, et al. 1995:150]。古い方は実年代で前 1000 年前後だが、誤差が大きい。前述の神奈川県下原遺跡のイネのプラント・オパールが検出された安行 3c 式土器は、突帯文土器をさかのぼる

時期であり、判断を保留せざるをえない。

(9)——これに先立つアクションがすでに大洞 A<sub>1</sub>～A<sub>2</sub> 式に生じていたのではないかという予断のもとに宮城県山王遺跡の該期の土器を点検し、夜臼式の影響を指摘したが [設楽・小林 2007:100]、石川日出志によって覆された [石川 2009]。山王遺跡で出土していた竪杵も視野に入れての調査であったが、竪杵は縄文前期に類例のある搗き杵であることが指摘され [名久井 2007:41-42]、この遺跡の土器破片の圧痕を調査した高瀬克範によると穀物の圧痕は皆無である。

(10)——大洞 A<sub>1</sub> 式と砂沢式との間は、実年代にして 200 年間はある。

(11)——菜畑遺跡の水田に関連する遺構は板付 I 式に降る可能性が指摘されているが、突帯文期にさかのぼって水田稲作がおこなわれていたことは認めてよい。

(12)——これは K. フラナリーが提唱した「広範囲生業」(Broad spectrum subsistence) [Flannery 1965:1250] と、少数の資源に対して労力を集中させる「焦点経済」(Focal economy) に対応する。焦点経済は、通常少数で非常に生産的な資源に焦点を絞る一方、それ以外の広範囲の食料の獲得も続ける。

(13)——関東地方ではこの時期以来、雑穀栽培よりもイネの栽培が卓越していく。弥生時代の遺跡から出土するイネと雑穀類の比率は圧倒的にイネが上回っており [寺沢・寺沢 1981]、弥生文化は朝鮮半島よりも水田稲作、イネへの志向性が強いこともこの現象と関係しているよう。

#### 引用・参考文献

- 荒巻 実・若狭 徹ほか 1986 『C 11 沖 II 遺跡 藤岡市立北中学校分割校舎・体育館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』藤岡市教育委員会文化財課
- 安藤広道 2002 「異説弥生畑作考—南関東地方を対象として—」『西相模考古』第 11 号, 1-56 頁, 西相模考古学研究会
- 石川日出志 1988 「伊勢湾沿岸地方における縄文時代晩期・弥生時代の石器組成」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』117-124 頁, 愛知考古学談話会
- 石川日出志 1992 「関東台地の農耕村落」『関東』新版古代の日本第 8 巻, 73-94 頁, 角川書店
- 石川日出志 1999 「東日本弥生墓制の特質」『新 弥生紀行』175-176 頁, 朝日新聞社
- 石川日出志 2001 「関東地方弥生中期中葉の社会変動」『駿台史学』第 113 号, 57-93 頁, 駿台史学会
- 石川日出志 2009 「宮城県山王(囲) 遺跡の「突帯文系土器」」『考古学集刊』第 5 号, 98 頁, 明治大学文学部考古学研究室
- 丑野 毅・田川裕美 1991 「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24 号, 13-36 頁, 日本文化財科学会
- 遠藤英子 2011 「レプリカ法による, 群馬県沖 II 遺跡の植物利用の分析」『古代文化』第 63 巻第 3 号, 122-132 頁
- 遠藤英子 2012 「レプリカ法からみた東海地方縄文弥生移行期の植物利用」『第 19 回考古学研究会東海例会 縄文／

- 弥生移行期の植物資料と農耕関連資料』7-14頁, 第19回考古学研究会東海例会事務局
- 遠藤英子・高瀬克範 2011「伊那盆地における縄文時代晩期の雑穀」『考古学研究』第58巻第2号, 74-85頁
- 大林太良 1987「ぶんかふくごう文化複合」『文化人類学事典』672-673頁, 弘文堂
- 岡本 勇 1966「弥生文化の成立」『弥生時代』日本の考古学Ⅲ, 424-441頁, 河出書房新社
- 小畑弘己 2011『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社
- 小畑弘己・真邊 彩 2011「レプリカ法による水天向遺跡出土土器の圧痕とその意義」『水天向遺跡(鹿児島県薩摩郡さつま町柏原水天向)』鹿児島県薩摩郡さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書(4), 126-129頁, 鹿児島県さつま町教育委員会
- 金関 恕 1989「総論」『弥生人とその環境』弥生文化の研究第1巻, 5-10頁, 雄山閣
- 小泉玲子ほか編 2008『神奈川県足柄上郡大井町 中屋敷遺跡発掘調査報告書 南西関東における初期弥生時代遺跡の調査』昭和女子大学人間科学部歴史文化学科
- 甲元真之 1991「弥生農耕の展開」『季刊考古学』第37号, 29-35頁, 雄山閣
- 後藤 直 1986「農耕社会の成立」『変化と画期』岩波講座日本考古学6, 119-169頁, 岩波書店
- 後藤 直 2006『朝鮮半島初期農耕社会の研究』同成社
- 小林青樹 1999『縄文・弥生移行期の東日本系土器』考古学資料集9, 岡山大学文学部
- 小林青樹・大工原 豊・井上慎也 2003「群馬県安中市注連引原遺跡における弥生時代前期集落の研究」『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』45-48頁, 日本考古学協会
- 近藤義郎 1962「弥生文化論」『原始および古代1』岩波講座日本歴史1, 139-188頁, 岩波書店
- 近藤義郎 1986「総論—変化・画期・時代区分—」『変化と画期』岩波講座日本考古学6, 1-24頁, 岩波書店
- 佐々木高明 1971『稲作以前』NHKブックス147, 日本出版協会
- 佐々木高明 1991『日本史誕生』日本の歴史1, 集英社
- 佐々木由香 2008「中屋敷遺跡の植物利用」『神奈川県足柄上郡大井町 中屋敷遺跡発掘調査報告書 南西関東における初期弥生時代遺跡の調査』179-181頁, 昭和女子大学人間科学部歴史文化学科
- 佐々木由香 2009「縄文から弥生変動期の自然環境の変化と植物利用」『季刊東北学』第19号, 124-144頁, 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 佐原 真 1975「農業の開始と階級社会の形成」『原始および古代1』岩波講座日本歴史1, 113-182頁, 岩波書店
- 佐原 真 1995「米と日本人」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集, 107-131頁, 国立歴史民俗博物館
- 佐原 真・金関 恕 1975「米と金属の世紀」『稲作の始まり』古代史発掘4 弥生時代1, 23-54頁, 講談社
- 設楽博己 1982「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻第4号, 335-357頁, 信濃史学会
- 設楽博己 1995「東日本における弥生時代の始まり」『展望考古学』75-93頁, 考古学研究会
- 設楽博己 2000「縄文系弥生文化の構想」『考古学研究』第47巻第1号, 88-100頁
- 設楽博己 2005a「側面索孔燕形銚頭考—東日本弥生文化における生業集団編成のあり方をめぐって—」『海と考古学』299-330頁, 六一書房
- 設楽博己 2005b「東日本農耕文化の形成と北方文化」『稲作伝来』先史日本を復元する4, 101-150頁, 岩波書店
- 設楽博己 2007「弥生時代の男女像—日本先史時代における男女の社会的関係とその変化—」『考古学雑誌』第91巻第2号, 136-184頁
- 設楽博己 2008『弥生再葬墓と社会』塙書房
- 設楽博己 2009「食糧生産の本格化と食糧獲得技術の伝統」『食糧の獲得と生産』弥生時代の考古学5, 3-22頁, 同成社
- 設楽博己・小林青樹 2007「板付Ⅰ式土器成立における亀ヶ岡式土器の関与」『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代の始まり第2巻, 66-107頁, 雄山閣
- 高瀬克範 2004a「中野谷原遺跡における弥生時代の石製収穫・除草具」『中野谷地区遺跡群2—県営畑地帯総合整備事業横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』163-166頁, 群馬県安中市教育委員会
- 高瀬克範 2004b『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房
- 都出比呂志 1984「農耕社会の形成」『原始古代1』講座日本歴史1, 117-158頁, 東京大学出版会
- 都出比呂志 1988「森本六爾論」『研究の歩み』弥生文化の研究第10巻, 133-145頁, 雄山閣
- 中尾佐助 1966『栽培植物と農耕の起源』岩波新書583
- 中沢道彦 2012「氷Ⅰ式期におけるアワ・キビ栽培に関する試論—中部高地における縄文時代晩期後葉のアワ・キビ栽培の選択的受容と変化—」『古代』第128号, 71-94頁, 早稲田大学考古学会

- 中沢道彦・丑野 毅 1998 「レプリカ法による縄文時代晩期土器の粉状圧痕の観察」『縄文時代』第9号, 1-28頁, 縄文時代文化研究会
- 中沢道彦・丑野 毅・松谷暁子 2002 「山梨県韮崎市中道遺跡出土の大麦圧痕土器について—レプリカ法による縄文時代晩期土器の粉状圧痕の観察(2)—」『古代』第111号, 63-83頁, 早稲田大学考古学会
- 中沢道彦・丑野 毅 2009 「レプリカ法による山陰地方縄文時代晩期土器の粉状圧痕の観察」『まなぶ』第2号, 17-42頁
- 中村五郎 1982 『畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器』私家版
- 中村五郎 1988 『弥生時代の曙光』未来社
- 中山誠二 2010 『植物考古学と日本の農耕の起源』同成社
- 中山誠二 2012 「日韓におけるイネ・アワ・キビ農耕の拡散に関する現状と課題」『第19回考古学研究会東海例会 縄文/弥生移行期の植物資料と農耕関連資料』1-5頁, 第19回考古学研究会東海例会事務局
- 名久井文明 2007 「現代に続く是川縄文人の技術」『2006 是川縄文シンポジウム記録集』26-44頁, 東奥日報社
- 禰田佳男 2003 「弥生時代開始期の遡及に関する諸問題」『弥生時代千年の問い—古代観の大転換—』11-30頁, ゆまに書房
- 林 謙作 1987 「続(エビ)縄紋のひろがり」『季刊考古学』第19号, 55-57頁, 雄山閣
- 春成秀爾 1999 「弥生文化を見る眼」『新 弥生紀行』23-24頁, 朝日新聞社
- 藤尾慎一郎 2003 『弥生変革期の考古学』同成社
- 藤尾慎一郎 2011 『〈新〉弥生時代五〇〇年早かった水田稲作』歴史文化ライブラリー 329, 吉川弘文館
- 松木武彦 2011 「石器から鉄器へ」『古墳時代への胎動』弥生時代の考古学4, 155-170頁, 同成社
- 松島 透 1964 「飯田地方における弥生時代打製石器—硬い耕地と石製農具—」『日本考古学の諸問題』考古学研究会十周年記念論文集, 59-68頁, 考古学研究会十周年記念論文集刊行会
- 宮田佳樹・小島孝修・松谷暁子・遠部 慎・西本豊弘 2007 「西日本最古のキビ—滋賀県竜ヶ崎A遺跡の土器付着炭化物—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集, 255-265頁
- 森本六爾 1929 「自序」『日本青銅器時代地名表』3-4頁, 岡書院
- 森本六爾 1935 『考古学』歴史教育講座第2輯, 四海書房
- 森本六爾 1938 「日本に於ける農業起源」『ドルメン』第2巻第9号, 1-4頁, 岡書院
- 山崎純男 2005 「西日本縄文農耕論」『韓・日新石器時代の農耕問題』33-55頁, (財)慶南文化財研究院・韓国新石器学会・九州縄文研究会
- 山内清男 1932a 「日本遠古之文化 縄紋土器の起源」『ドルメン』第1巻第5号, 85-90頁, 岡書院
- 山内清男 1932b 「日本遠古之文化 縄紋式以後」『ドルメン』第1巻第8号, 60-63頁, 岡書院
- 山内清男 1937 「日本に於ける農業の起源」『歴史公論』第6巻第1号, 266-278頁, 雄山閣
- 山内清男 1967 「石器時代土器底面に於ける稲粃の圧痕」(未発表草稿・大正14年4月長谷部博士に提出)『山内清男・先史考古学論文集』第四冊, 207-208頁, 先史考古学会
- 和島誠一 1974 「農耕文化の開始と弥生時代」『日本のあけぼの』図説日本の歴史1, 133-184頁, 集英社
- 安 承模(小畑弘己訳) 2007 「作物遺体を中心にみた朝鮮半島の先史農耕」『日本考古学協会2007年熊本大会研究発表資料集』311-326頁, 日本考古学協会2007年度熊本大会実行委員会
- D' Andrea, A.C., Crawford, G.W., Yoshizaki, M., Kudo, T., 1995, Late Jomon cultigens in northeastern Japan, *Antiquity*, 69, pp.146-152.
- Flannery, K.V., 1965, The Ecology of Early Food Production in Mesopotamia, *Science* 147, pp.1247-1256
- Steward, J.H., 1955, *Theory of Culture Change*, University of Illinois Press.

【付記】論文審査終了後、キビの圧痕のデータでもっとも古い資料が大阪府東大阪市宮ノ下遺跡の船橋式であることを知った。(中沢道彦2013「レプリカ法による近畿・東海・中部高地の調査成果とその評価」『シンポジウム レプリカ法の開発は何を明らかにしたのか—日本列島における農耕の伝播と受容の研究への実践 予稿集』2-9頁)。

(東京大学大学院人文社会系研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2012年12月7日受付, 2013年3月26日審査終了)

---

## Yayoi Culture as a Complex of Multiple Farming Cultures

SHITARA Hiromi

With regard to the definition of the Yayoi period, there are two kinds of perspective. One standpoint, attaching importance to a turning point of economic history, regards the full-scale initiation of agriculture such as rice cultivation as the start of the period. Another standpoint, putting stress on social aspects, pays more attention to qualitative changes in ideology. Criteria of period division should reflect trends at each time. At the same time, they should be simple and clear. Although both standpoints adopt rice cultivation as criteria, the latter standpoint is unlikely to be objective and clear for everyone because it requires a subjective judgment such as purposes and aims of the phenomenon. The period division should be independent of historical assessment. Adopting the former standpoint, this article defines the former's ambiguous criterion of the full-scale initiation as the formation of a complex of farming cultures, a significant difference from the Jomon farming culture. The present article also reviews the history of studies on the Yayoi culture in eastern Japan as well as recent research using the replica method, which is the analysis of modeling the holes on the surface of potteries and observing by microscope and deciding the species of plants, to give a picture of the initial farming culture. Regarding the Initial Yayoi culture in eastern Japan as a complex of farming cultures, this article observes differences from the former studies that refuse to accept as the Yayoi culture the farming culture of the Kanto region before the middle of the Middle Yayoi period or that of the northern Tohoku region. The article recognizes the Yayoi culture as a complex of farming cultures that inherited a wide variety of agricultural forms which had been slowly cultivated in China and then developed in each area according to its own land conditions, environmental aspects, and group organization. The formation of true farming societies and political societies is considered here to have progressed in a limited area in the latter half of the Yayoi period.

Key word: Yayoi period, Complexed farming cultures, Period division, Yayoi culture, Replica method

